

「よりよく社会と関わる力」を育む社会科指導の在り方（第二年次）

－多角的思考を促す問題解決的な学習の充実を通して－

伊達市立梁川小学校 福島県教育センター 長期研究員 富田 彩

1 研究の趣旨

小学校社会科学習指導要領や第7次福島県総合教育計画で示されている国や県の方針から、小学校社会科においては、問題解決的な学習を通して解決に向かうプロセスを学び、よりよい発展や社会の在り方について多角的に考え、表現する力を育成するための授業改善が求められている。

第一年次研究では、児童の問いの解決を繰り返すことにより、知識を獲得、集積し、それらを活用して単元を貫く学習問題（以下「学習問題」とする）の解決ができるようにした。その結果、児童の現実的な選択・判断と、問いの質的向上、その解決で得た知識の集積に関連があることが分かった。一方で、学習問題を意識することができなかった児童は、問いを解決する必然性を感じる事が難しかったため、知識を獲得することもできなかった。

そこで、本研究では、「よりよく社会と関わる力」を「問いを見いだし、その解決によって獲得した知識を根拠に、よりよい発展や社会の在り方について多角的に考え、表現する力」として、その育成を目指し、以下の仮説を設定した。

※1 本研究では、「学習問題」を、社会に見られる課題と関連があり、単元を通して追究していく大きな問いと捉える。また、「問い」を、児童が毎時間の学習の中で社会的事象と出合うことで生まれるあらゆる疑問や予想と捉える。

小学校社会科の授業において、多角的思考を促す問題解決的な学習の充実を図れば、児童一人一人に「よりよく社会と関わる力」を育成することができるであろう。

【手立て1】問いの導出と共有・練り上げを図る場の設定

【手立て2】問いと学習問題と知識の関連を図るまとめと振り返りの工夫

【手立て3】多角的思考を図る対話場面の設定

2 研究の概要

(1) 問いの導出と共有・練り上げを図る場の設定

多角的な思考を促す問いを見いだしたり、問題解決に必要な問いを選択したりするための視点を提示する。また、導出された問いを分類・整理し、児童相互による共有、練り上げを図る場を単元及び単位授業時間内に設定する。多角的な思考を促す問いを見いだす視点をもち、目的意識をもって問いを解決する姿につなげる。

(2) 問いと学習問題と知識の関連を図るまとめと振り返りの工夫

「学習内容」「学習問題に対する自分の考え」「考えの根拠」を明記できるような一枚ポートフォリオを用いて振り返りを行う。問いの解決によって得られた知識を関連付け、それを根拠として学習問題に対する自分の考えを表現する姿につなげる。

(3) 多角的思考を図る対話場面の設定

「生産者」や「消費者」などの立場を意識した対話場面を設定する。その後、実社会で活動している人々と対話を行う。よりよい社会の在り方について多角的に考える姿につなげる。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 児童の意見文等の記述から、よりよい発展や社会の在り方について多角的に考え、表現する力の高まりがみられた。また、問題解決的な学習の充実と多角的思考には正の相関があることが分かった。さらに、学習問題についての対話が、多角的思考を促す問いの導出や考えの広がりにも効果があることが分かった。以上のことから、児童が学習問題を意識して、学習を進めることにより、多角的思考を促す問いとその解決によって得られた知識、その知識を根拠とした自分の考えを交流する対話が関連し合い、よりよく社会と関わる力を高めることができた。

(2) 今後の課題

○ 正解を求めることが難しい問題において絶対的な解を求める児童の姿が見られた。絶対的な解を児童へ求めているかという視点で自身の授業を振り返るとともに、多様な価値の存在を知る「でも」でつなぐ対話を起点とし、社会全体の新たな価値を考える対話へと段階的に向上していく指導を重ねていくことで、未来へつながる最適解を模索するという意識の涵養に努めたい。